

第2回検討会における意見・要望への対応

| 分野               | No.   | 意見・要望   | 対応   |  |
|------------------|-------|---|--|--|
| 1<br>栽培漁業<br>対象種 | 現行対象種 | 1   | ・アンケート結果に、「ヒラメが低価格になり過ぎる」との意見があったが、12～2月は安い時期だが、その他の時期は高級魚であることから、ヒラメの放流は続けた方がよい。                                    | ・今後もヒラメの種苗生産・放流を継続することとしたい。<br>(→基本方針1(1)(2)に反映済)  |
|                  |       | 2   | ・クルマエビについては、時期を決めて、事業を継続するのか見直すのか検討に盛り込んでほしい。  | ・クルマエビについては、生産・放流を要望する団体があるため、当面、事業を継続するが、新たな対象種の栽培漁業の事業化の目処が立った段階において、放流効果等も踏まえ、継続について再検討することとしたい。<br>(→基本方針1(2)に反映済)   |
|                  |       | 3   | ・クルマエビについては、漁獲量が減り、放流効果もはっきりしないことから、将来、継続について再検討することはやむを得ないと思うが、当面事業を継続する間においては、放流方法、放流時期等を再検討するとともに、放流効果の検証に努めてほしい。 |  |
|                  |       | 4   | ・種苗放流は放流効果等の科学的な知見を踏まえて判断する必要があることから、クルマエビについて、有効な標識等も含めて、調査について検討している。  |  |
|                  | 新魚種   | 5   | ・漁獲実績の少ないクルマエビの代わりにトヤマエビの放流を検討してはどうか。  | ・トヤマエビについては、水産研究所において、昭和62年度から放流技術開発を開始し、平成7年度から16年度まで、新たに整備した深層水利用研究施設において、種苗生産から放流までの一貫した技術開発を行ったが、回収率が高くないこと、放流までの飼育期間が長くコストが大きいため事業化に至らなかった経緯がある。<br>・このため、トヤマエビの事業化の検討にあたっては、まずは、費用対効果等について改めて研究する必要があるが、新魚種の事業化については、当面、漁業者から要望の強いキジハタ、アカムツの早期事業化に力を入れることとしたい。 |
|                  |       | 6   | ・トヤマエビは非常に価値が上がってきているので、富山県の売り手にしてほしい。   |  |
|                  |       | 7   | ・キジハタ、アカムツの放流技術の確立には大変期待している。  | ・キジハタ、アカムツについては、安定した種苗生産技術の開発や放流効果の検証等に取り組み、栽培漁業の早期事業化を推進することとしたい。<br>・特に、水産研究所に新たに整備したキジハタ、アカムツ種苗生産施設において、大量の稚魚を生産することにより、放流に適した時期や場所を検証する比較放流試験を実施し、事業化に向けた技術開発を加速させることとしたい。<br>(→基本方針1(3)に反映済)  |
|                  |       | 8   | ・キジハタはこれからの種苗生産に期待している。また、アカムツを放流で増やして、富山県の人々が食べられるようになれば嬉しい。  |  |
|                  |       | 9   | ・アカムツをたくさん生産・放流することで、消費者の手に届きやすくなると思う。   |  |
|                  |       | 10  | ・新たな対象種であるキジハタやアカムツの比較放流試験を実施することは重要であり、その成果を期待する。   |  |
|                  | 11    | ・ヒラメは10年前と比べてリーズナブルになった。アカムツも今後そうなると良い。   |  |  |
| 2<br>種苗の生産・放流    | 放流効果  | 12  | ・放流効果等の調査等については、水産研究所と一緒に漁協青年部も協力していきたい。   | ・放流効果や対象種の資源状態等を適切に把握するため、水産研究所等が中心となって、放流対象種の資源量、年齢別採捕量、放流魚の混入率等のデータの収集に努めるとともに、これらのデータを分析し、それらの結果について栽培漁業に取り組む関係者への還元にも努めることとしたい。<br>(→基本方針2(4)に反映済)   |
|                  |       | 13  | ・放流効果等については、客観的なデータを取り続けることが重要である。   |  |
|                  |       | 14  | ・水産研究所や栽培漁業センターと漁業者団体との連携・協力により、種苗の中間育成・放流を効果的に実施できる体制を構築していただきたい。   |  |
|                  | 環境影響  | 15  | ・幼稚魚の食性や生息場所等の生態調査情報を踏まえた放流を実施していただきたい。  | ・栽培漁業がさらに定着するよう、漁業関係者が行う中間育成・放流等の指導や技術の普及に取り組むこととしたい。<br>(→基本方針2(3)を一部修正(追加))  |
|                  |       | 16  | ・天然海域におけるキジハタ、アカムツ稚魚の生息場所や食性等の生態について情報把握に努めてほしい。   |  |
|                  |       | 17  | ・より効果的な種苗放流を実現するため、放流手法の開発や、稚魚の放流場所の造成等についても検討してほしい。   |  |
|                  | 環境影響  | 18  | ・単一魚種の大量放流による生態系のバランスの変化を懸念する。<br>・キジハタが捕食魚種であることを忘れてほしくない。  | ・水産研究所では、これまでも漁業者へのアワビの放流手法の指導や、調査結果に基づくヒラメの放流適地適期の提案を行ってきている。現在は、キジハタの放流場所に魚礁を設置することが有効か、魚礁付近に放流した種苗のその後の残存調査を行っている。<br>・今後とも、放流手法については、沿岸の生息環境変化に対応して、柔軟に検討していくこととしたい。<br>(→基本方針2(3)に反映済)  |
|                  |       | 19  | ・放流による影響を把握するため、客観的なデータを取り続けることが重要である。   |  |
|                  |       | 20  | ・種苗放流が周囲に生息する魚種に大きな影響を及ぼさない場所で実施することなど、具体的に記述した方がよい。   |  |
|                  |       | 21  | ・出来るだけ早く、エゾアワビの放流を止めてクロアワビに切り替えるほうがよい。   |  |
| 22               |       | ・遺伝的多様性に配慮し、クロアワビの放流に方針転換する姿勢を盛り込んでほしい。   |  |  |
| 3<br>推進体制        | 全体    | 23  | ・種苗生産業務の特殊性を考慮しつつ、職員の配置や勤務体制について、早めに検討をしておく必要があると考える。  | ・氷見センターの職員は、現在3人と少ないことから、休日における対応も含め、教育、観光に適切な対応ができるよう検討を進めることとしたい。<br>(→基本方針3(3)③に反映済)  |
|                  |       | 24  | ・氷見センターは漁業者の海洋環境問題等への取組を知っていただくような場としていただきたい。  | ・若い世代等の栽培漁業への興味・関心を高めるため、教育・産業観光での活用を図ることとしており、今後、検討会においてさらに具体的な推進方策について検討を進めることとしたい。<br>(→基本方針3(3)③に反映済)  |
|                  | 25    | ・観光と連携した見学場所として、また、子供たちへの教育のため、興味をもってもらう展示等を行う施設として、氷見センターは最適と考える。  |  |  |
|                  | 26    | ・氷見センター整備には、費用を十分かけて、氷見市とも連携し一大観光拠点化を図ってほしい。  |  |  |
|                  | 27    | ・産業観光では、魚に親しむ機会として、育てて、獲って、食べる一連の場を氷見で提供できるのではないかと。<br>・氷見市や市の観光協会で学習旅行等を企画してもらい、栽培センターが、一連の中で部分的な役割を担う形がよいのではないかと。 | ・産業観光のモデルコースへの組込み、小学生の社会見学なども視野に入れ、氷見市と連携して対応することとしたい。<br>(→基本方針3(3)③に反映済)   |  |